

日本中世英語英文学会に所属した時は、まだ大学院修士課程に入学したばかりの院生でした。「談話会」から「学会」に昇格して間もないという時期であり、設立に貢献した各大学の先生方が非常に生き生きと学会運営に力を入れておられたのがたいへん印象に残っております。松浪有先生、繁尾久先生、鈴木榮一先生、池上忠弘先生、菅野正彦先生、そうそうたる研究者がまだとてもお若く、学生をも圧倒するパワーで大変活躍されておりましたが、今は他界された先生方もあり、当時の大勢で賑やかな活気のある時代が懐かしく思い出されます。

私が初めて学会発表に申し込んだのは修士課程に入ってまもなくで、専門としたのは古英詩の哀歌でした。学部生の時はシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を卒論のテーマとし、成城大学の大山俊一先生に師事いたしました。私の在学中に他界されてしまいました。実は大山先生に勧められて、アングロ・サクソン文学・中世英文学を始めることになったのです。大山先生としてはシェイクスピアを学ぶにはそれ以前の知識がなければだめだ、という意味でご指導されたのだと思いますが、古英詩の古風で荘厳で格調高い表現と内容にすっかり魅了されてしまい、シェイクスピアを放り出し、アングロ・サクソン文学に転身しました。大学院の指導教授がちょうどサバティカルで渡英されていたにもかかわらず、無謀にも何の指導もないまま、自分で読んだ資料をもとに安易に学会発表に応募しました。結果は案の定、簡単にリジェクトされました。学生なのだから力試しだという軽い気持ちがあったことは事実です。学会が始まったばかりの当時では、院生が発表することもかなりまれで、発表者は名のある研究者ばかりで内容も私たち院生にとってはたいへん参考になる最新の情報が提供されておりました。学会発表を数々聴いた後に、院生といえども研究者としてふさわしい資料調査と分析、結果がなければ発表することはできないことを悟り、修士課程を終え博士課程後期に進学し、英国留学を経て、帰国後に『ベーオウルフ』に関するテーマで学会発表を行いました。

学会が設立した直後、明治学院大学の繁尾先生が事務局長となられ、当時院生であった野地薫先生他、院生の方々が無給で、いわば自己犠牲的な働きで学会をもり立ててくださいました。設立当時でしたから事務局の引き継ぎなど何もなく、明治学院大学の方々自らが学会運営の手順を作ることから始められていました。繁尾先生と池上忠弘先生との繋がりから、成城大学の先生方、院生たちも当日の受付などできるだけのお手伝いをさせていただきました。その後、成城大学の池上先生が事務局長となられ、今度は当時成城短期大学に所属されていた池上恵子先生のご指導の下、成城大学池上ゼミの院生たちが一丸となって事務局の運営を務めました。毎日届く会費の帳簿付け、会員住所管理、会計収支の管理など、手作業ではとても効率が悪く、当時ではまだ大変高価であったPCを研究室に設置し、会員管理をデータ化しました。成城大学が開催校になった

時は、会場整備、懇親会準備など、中心となって指揮をとられた池上恵子先生の八面六臂の活躍は驚嘆に値しました。十分に準備を尽くしても、当日の懇親会では参加予定人数を大幅に超過し、今すぐ調達できる食材をありったけ出してくださいと学食の厨房に懇願し、それでも開始後1時間しないうちに全ての食材を食べ尽くして何も残っていない状態になってしまいました。事務局運営に関しては様々なハプニングが記憶にいつまでも残っています。

今思い返せば、その頃の事務局運営に実際に関わらせて頂いたことで、学会全体がどのように動いているかを理解できたと思います。当時は当然ながら無料奉仕で、院生たちは自分の研究の傍ら一生懸命にお手伝いをさせて頂きました。学会設立直後のうまく軌道に乗るまでの期間、各大学の先生方と学生たちが協力して支えたと言っても過言ではないでしょう。今、学会の現状を鑑みて思うことは、喜ばしいことに院生の学会発表がたいへん活発になったことです。また逆に、各大学での古英語・中英語の講座閉鎖が原因となっているためか、大学院進学者の全体数が少なくなっているのも事実です。従って若手研究者の数の減少が懸念されます。私の年代の研究者が大学教員になってから既に15年は経っていますが、若手研究者の数は年長の研究者に比べれば極端に少ないと言えます。たいへん難しいことではありますが、今後の学会に望むこととして、古英語・中英語以外の、理系をも含む幅広い分野との共同研究発表、そして古英語・中英語研究が現代社会に役立つことをアピールする研究を、学会全体で開発・支援していくことが必要ではないかと感じます。古英語・中英語の研究がいずれ終焉を迎えることのないように、何とかしたいものと思います。